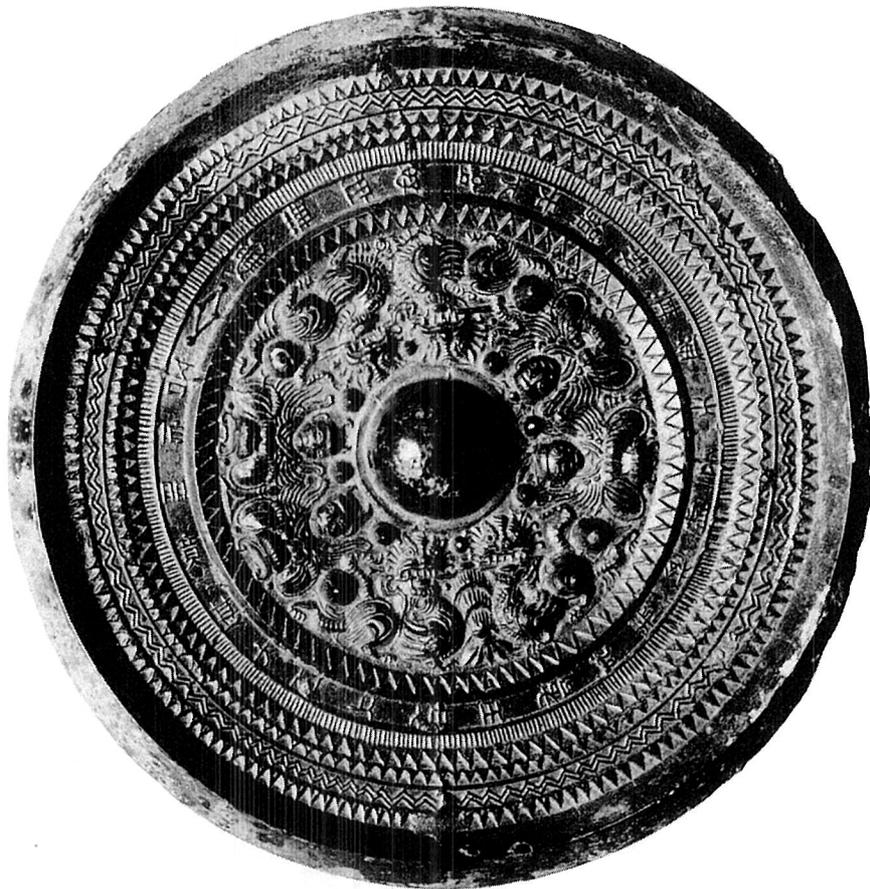


広島市の文化財 第16集

中小田古墳群

—広島市高陽町所在—



1982年3月

広島市教育委員会

序 文

昭和36年、安佐郡高陽町（現広島市）の中小田第1号古墳から、京都府の椿井大塚山吉墳、大阪府の万年山古墳及び福岡県の石塚山古墳出土のものと同範の「吾作銘三角縁四神四獣鏡」が発見されました。三角縁神獣鏡が出上したことにより、中小田第1号古墳は、4世紀代に大和地方の最高支配者と政治的かわりをもつ有力者を葬った古墳であり、太円川流域最古の古墳に属するものと解されています。

中小田古墳群は、これまで竪穴式石室2基、箱式石棺4基からなる4基の古墳が確認されており、重要遺跡として周知されていたものの、その範囲・内容等について不明な部分が多々ありました。

広島市教育委員会では、追りくる開発の波に対処するため、このたび中小田古墳群に関する範囲・内容の確認調査を実施いたしました。短い調査期間ではありましたが、今回の調査により、中田円古墳群の実態を把握するうえでの貴重な資料を数多く得ることができました。

この貴重な資料をもとに、今後中小田古墳群の保存措置を検討いたしたいと思しますので、関係各位のご指導とご協力をお願い申し上げます。

終りに臨み、本調査に終始絶大なるご指導・ご援助を賜りました文化庁、広島県教育委員会文化課及び広島大学文学部考古学研究室の諸先生方並びに調査に際し心よくご協力下さいました土地所有者の方々に厚く御礼申し上げます。

昭和55年3月

広島市教育長 富 永 治 郎

中小田古墳群

目 次

序 文	
中小出占墳群の位置・環境	1
調査の古墳	3
1．中小田第1号古墳	2．中小田第2号古墳
3．中小田第3号古墳	4．中小田第4号古墳
5．中小田第5号古墳	6．中小田第6号古墳
7．中小田第7号・第8号古墳	8．中小田第9号古墳
9．中小田第10号古墳	10．中小田貝塚
11．中小田土壙墓	
ま と め	19
あ と が き	

挿 図 ・ 写 真 目 次

第1図 中小田古墳群位置図	2	付図1 中小田古墳群付近地形図	おりこみ
第2図 中小田第1号・第9号古墳地形図	3	付図2 中小田第5号・第6号古墳・貝塚付近地形図	23
第3図 中小田第1号古墳竪穴式石室実測図	5	付図3 中小田第2号・第3号・第4号古墳付近地形図	24
第4図 中小田第1号古墳出土車輪石実測図	7	付図4 中小田第1号・第9号古墳付近地形図	25
第5図 中小田第1号古其出土鉄斧・玉類実測図	8	付図5 中小田第10号古墳付近地形図	26
第6図 中小田第2号古墳地形図	9		
第7図 中小田第2号古墳竪穴式石室実測図	11	写真1 中小田第1号古墳近景	4
第8図 中小田第2号古墳出土鉄器・土器実測図(1)	12	写真2 中小田第1号古墳竪穴式石室全景	4
測図(1)		写真3 中小田第1号古墳出土鏡	7
第9図 中小田第2号古墳出土鉄器実測図(2)	15	写真4 中小田第1号古墳出土車輪石	7
第10図 中小田第2号古墳出土鉄器実測図(3)	15	写真5 中小田第2号古墳近景	10
第11図 中小田第4号古墳地形図	16	写真6 中小田第2号古墳竪穴式石室全景	10
第12図 中小田第9号古墳第2号箱式石棺出土玉類実測図— 土玉類実測図	17	写真7 中小田第2号古墳出土冑	13
第13図 中小田第9号古墳箱式石棺配置図	17	写真8 中小田古墳群付近航空写真	22
第14図 中小田土壙墓実測図	18		
第15図 中小田土壙墓襦実測図	18		

中小田古墳群の位置・環境

中小田古墳群は、広島県広島市高陽町大字小田中小田にある。この高陽町は、広島県西北部の冠山山塊を源とする太田川が、可部町付近で流路を南に変え、まさに広島のデルタに出ようとするところの東側に位置している。

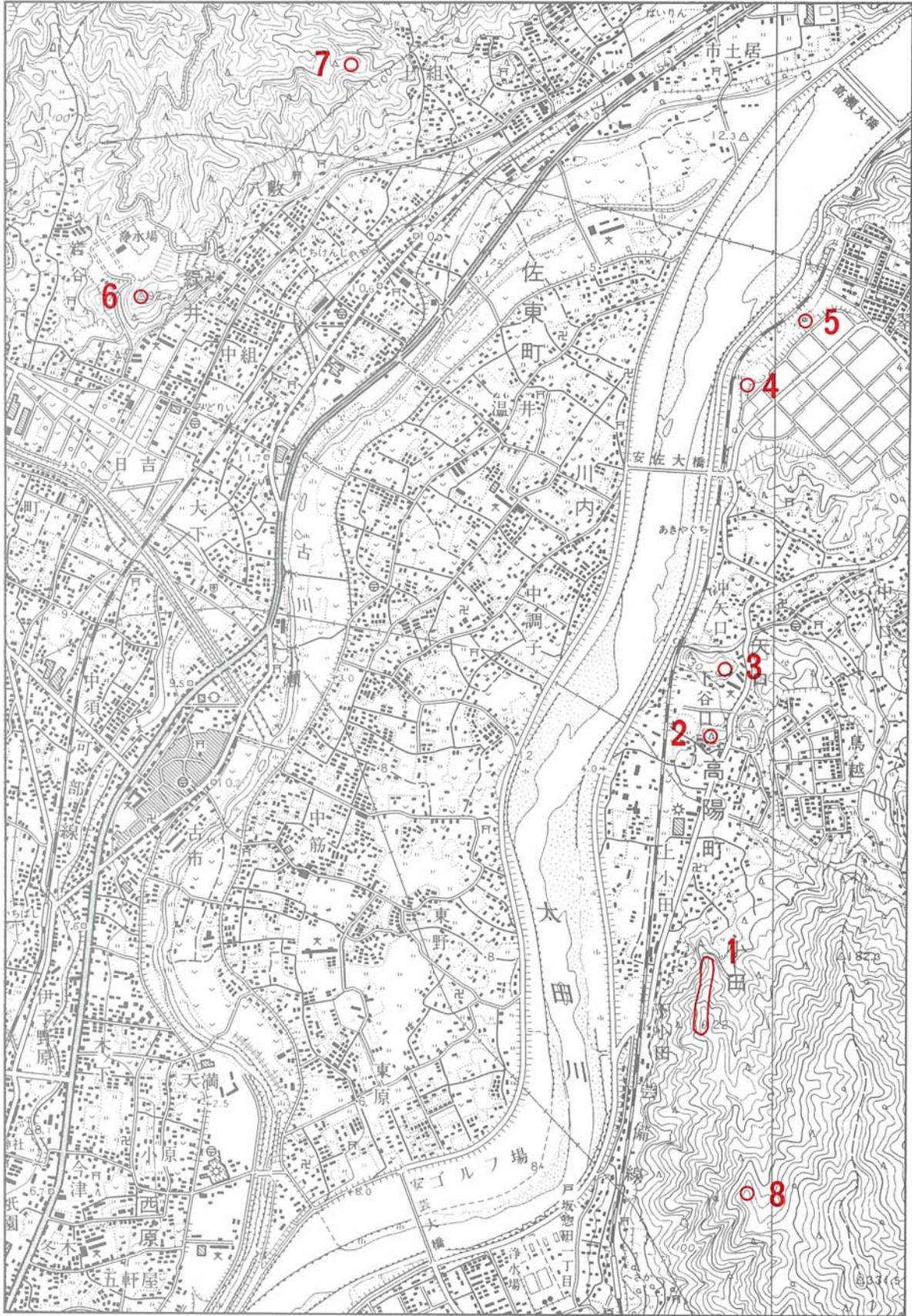
太田川の両岸には、二ヶ城山や阿武山・武田山など標高400～500mの丘陵があり、これらの山塊からは、太田川の流路に向って数多くの低丘陵が派生しており、遺跡はこれらの低丘陵の突端部に位置するものが多い。

高陽町の東方には、古くから銅鐸・銅剣・銅戈の出土で知られる安芸町福田の木ノ宗山遺跡や弥生後期の上深川遺跡などがあるが、近年は広島市のベッドタウンとしての大規模な住宅団地の造成が相次ぎ、高陽町大字矢口・玖の地城を中心に弥生から古墳時代にかけての遺跡が多数あきらかにされており、このころから人々が生活しはじめたことがうかがえる。しかし、当時はまだ住居単位がせいぜい3・4戸を一単位とする小さな集団を形成していたものが多いようである。地形図に太田川と旧流路の古川とがあることからみて、太田川は度々氾濫してその流路を変えており、このため耕作に適した沖積低地がひろがらず、したがって生産力もあまり向上しなかったものと考えられる。

中小田古墳群は、太田川に沿って南から北へ突出した標高60～130mの丘陵稜線上に位置しており、10基から形成されているが、稜線が狭く、ところどころに花崗岩の露頭があり、傾斜もかなりつよいところから、自然の地形を最大限に利用して築成されている。第1号古墳は、古墳群のなかでは中心的位置をしめるものであるが、このような自然地形に制約されたためか南方上手に位置する第2号古墳～第8号古墳や北側の第9号・第10号古墳は、各々20～90m前後離れており、かなり散在しているといえる。

太田川下流域には、竪穴式石室や箱式石棺を内部主体とする前半期のものとみられる古墳がいくつもある。左岸では、中小田古墳群(第1図1)をはじめとし、大陸の青銅斧の形態に通ずる鑄造鉄斧などが出土した西願寺墳墓群(4)や大型の土製勾玉出土の西願寺北遺跡(5)、鉄製品の多い上小田古墳(2)などがあり、右岸では、内行花文鏡片や玉類などが出土した神宮山古墳(6)や環状乳画文帯神獸鏡出土の字那木山古墳(7)、鏡・鉄製品などが出土したとされる祇園町三王原古墳、短甲出土の安古市町白山第1号古墳などがあげられる。いずれも標高90～130mの丘陵上に立地しており、互いに指呼の間に眺めることができるが、墳丘規模の大きなものはない。

副葬品に鏡や鉄製品が多いことからみて、広島湾をのぞむ内海交通の要衝をおさえるものとしての意義を有していたのであろう。しかし、横穴式石室を内部主体とする後半期の古墳では、いまのところ目立ったものがなく未解決の問題が多い。



第1図 中小田古墳群位置図 (1 : 25,000)

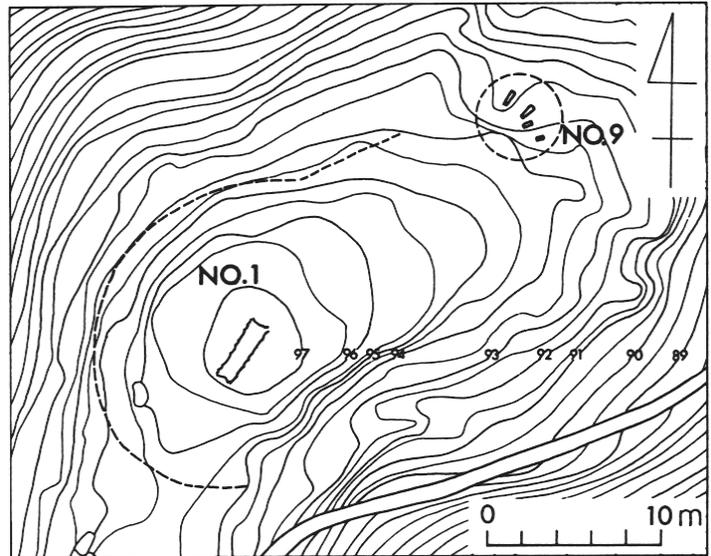
- (1. 中小田古墳群 2. 上小田古墳 3. 弘住古墳 4. 西願寺墳墓群)
 (5. 西願寺北遺跡 6. 神宮山古墳 7. 宇那木山古墳 8. 湯釜古墳)

調査の古墳

今回の調査は、1979(昭和54)年9月25日から10月29日の間、実施した。その目的は、古墳群の範囲確認に主眼をおいた地形測量図の作成ならびに第1号古墳と第2号古墳の主体部の調査を中心とした資料の作成にあった。その結果、従来から知られていた4基の古墳(第1号・第2号・第3号・第9号古墳)のほかに、新たに6基の古墳と貝塚1か所、弥生後期の土壌墓1基などをあきらかにすることができた。

1. 中小田第1号古墳

a 外形 中小田第1号古墳は南北にのびる尾根上の標高97mの地点に位置する。石室のある円丘部の北東にはあたかも前方部のような緩い傾斜地が続いている。この古墳は発見当初から流土が著しく、墳形は不明瞭であったが、直径約20m・高さ3m以上の円墳と推定されていた。



今回、墳丘の調査を一部実施したが、**第2図** 中小田第1号・第9号古墳地形図(数字は標高)円丘部とそれに続く北東側傾斜地では上面と側面を削平した地山整形が認められ、裾に平坦面をめぐらすことが確認された。しかし、北東側傾斜地の先端と東側斜面は流土が激しく、全容は把握できなかった。第2図の破線は地山整形の裾線を示しているが、封土の流失などを考慮すると、当初は全長約30m・後円部径約20m・高さ4m前後の前方後円墳であった可能性が強い。内部主体は推定後円部の中央部に構築された竪穴式石室である。埴輪、葺石などの外表施設は確認されていない。

b 内部主体 竪穴式石室は、内法で全長3.5m・幅0.9~1.08m・高さ1.1mを測る。主軸は北東-南西で、北東側に頭位をとり、当初蓋石は1枚が残存していた。墳丘の調査で、地山上面を径1.1mの円形に削平整形していることが確認されたが、ここに盛土した後、さらに上面から石室用墓壇を掘り、底にマサ土を厚く敷き、石室を構築している。石室の根石は横長の石材を南西側壁から順に左回りに配置しており、基本的には根石を含めた2~3段が長手積みでその上部の3~4段が小口積みとなっていて、全体として7~8段積みの側壁である。使用石材は花崗岩がほとんどで、長さ40cm・幅30cm・厚さ15cm前後のものが多い。壁体は垂直に近く積み、持送りの程度は小さい。上面には広い範囲に石材がみられるが、控積みは簡略化している。両小口壁では、中央部の上から2段目の石材が立で位置になっている。石室床面は平坦で、頭胸部周辺には朱が顕著に認められる。床面の状態から、マサ土の上面に直接組合せ式木棺が安置されたと推定される。

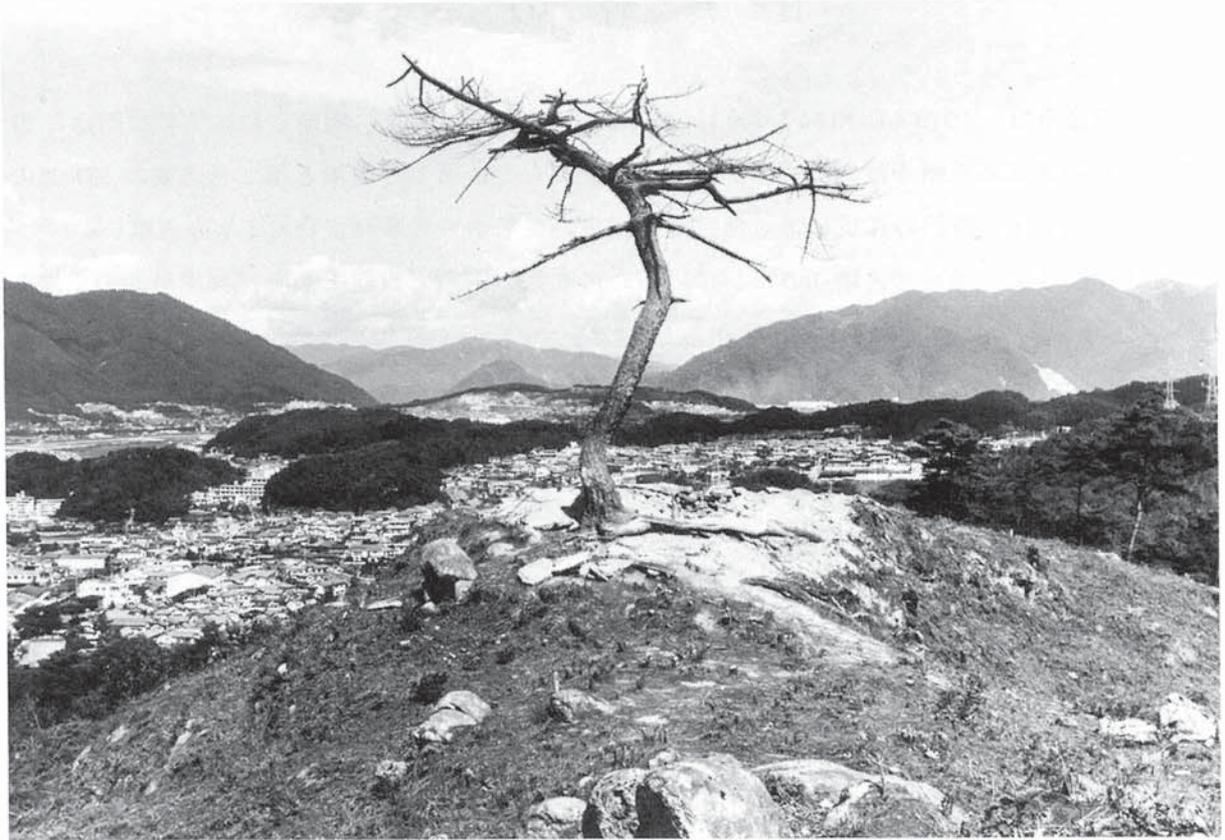
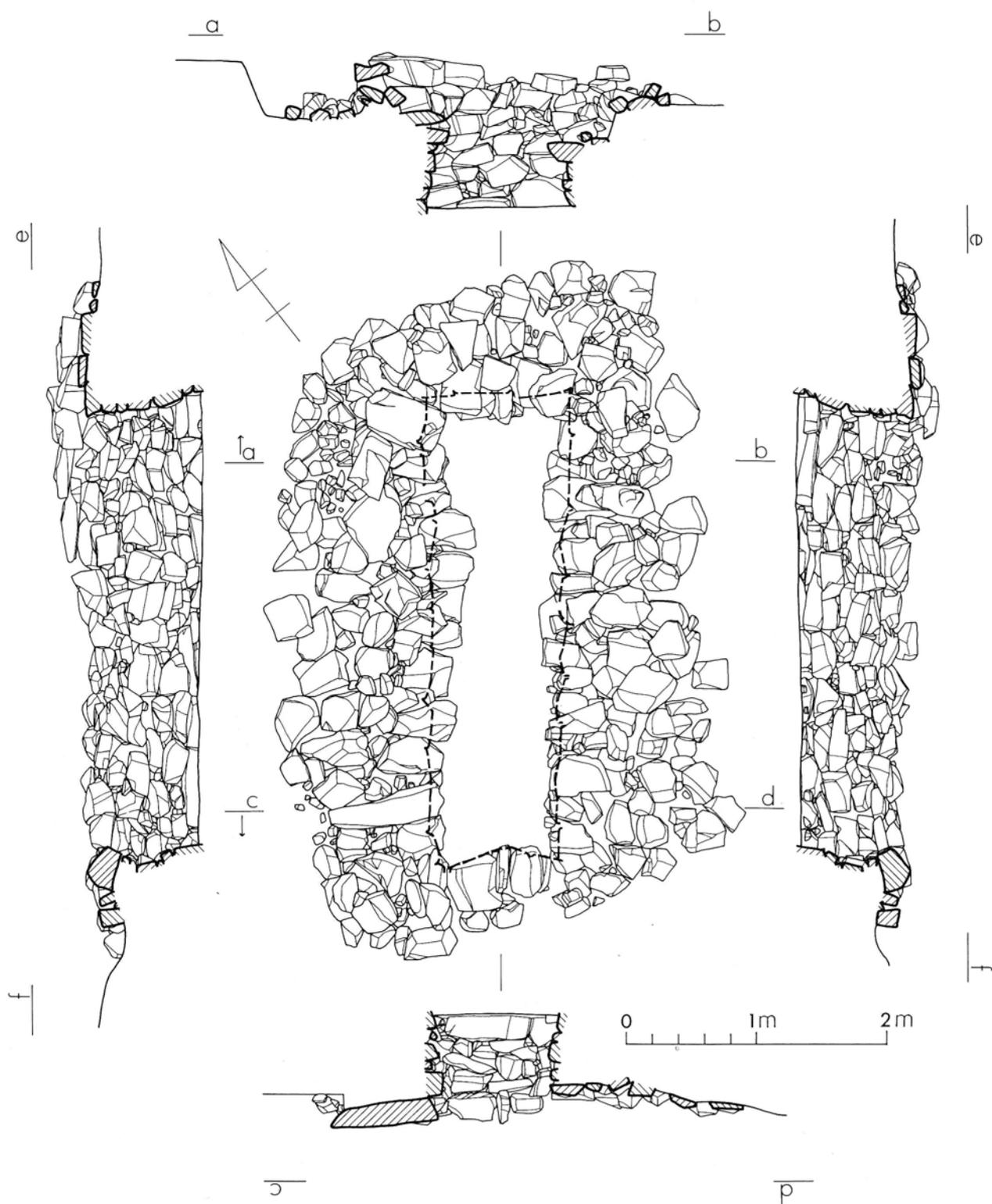


写真 1 中小田第1号古墳近景



写真 2 中小田第1号古墳竪穴式石室全景



第3图 中小田第1号古墳竖穴式石室实测图

c **出土遺物** 銅鏡2・車輪石1・玉類・鉄斧2が、石室の北東寄りの部分に集中して出土した。石室の幅は北東側が広く、遺物の出土とあわせて朱の遺存も顕著で、頭胸部がこの位置にあったことが考えられる。北東小口壁から0.5mはなれた石室中心線のやや西寄りに短冊形鉄斧と有袋鉄斧があり、鏡はさらに0.6m南西に寄った石室中心線上に、2面が重なった状態で出土した。鏡背を上に向けた三角縁神獸鏡を上部に、鏡面を上に向けた獸帯鏡を下部に、互いに鏡面を向い合せた形で重ねていた。玉類は鏡の下面及び周辺に集中して検出された。鏡から南西方向に0.6mはなれた石室中心線の東側から、車輪石が表を上にして、環体の幅の狭い方を北東に向けて出土した。鏡の周辺から、木棺片とみられる朱の厚く付着した木片が検出されている。三角縁神獸鏡(写真3,左側)は吾作銘四神四獸鏡で、面径20.1cm・縁高0:9cm・面の反り約0.6cmを測る。鑄上りはよく、内区文様、銘文は鮮明で、白銅質を呈している。シャープな三角縁に続いて、外向鋸歯文、複線波文、外向鋸歯文の圈帯がめぐり、1段下る斜面にも外向鋸歯文圈帯がある。櫛歯文圈帯をはさんで銘帯がある。ここに左回りの「吾作明竟甚大、上有王喬及赤松、師子天鹿其義龍、天下名好世無雙」の28文字からなる銘文がある。銘文の初めと終りの間に「」文様を配置している。銘帯から1段高くした内側の斜面に外向鋸歯文圈帯をめぐらせ内区となる。内区は4乳で区画され、求心的に有翼の双神像、巨を銜街む双獸像が交互に配置されている。神像は冠帽からみて、東王父・西王母を表わしたものとわかる。獸像は双獸が向い合う形になっていて、一方の双獸の間には笠松文様がある。円鈕のまわりに8個の小乳がめぐり、1段高くなった鈕座に径3.35cmの鈕がある。重量は1,116gを量る。京都府椿井大塚山古墳、大阪府万年山古墳・福岡県石塚山古墳出土鏡と同范関係にある。

上方作銘獸帯鏡(写真3,右側)は面径13.0cm・縁高0.4cm・面の反り0.25cmを測り、白銅質を呈している。内区文様、銘文は鑄上りが甘く、細部は鮮明でない。縁部は斜縁で、丸味のあるにびい稜をもつ小三角縁状を呈する。外区には細い突線をはさんで、2重圈帯の外向鋸歯文帯がめぐる。1段下って櫛歯文圈帯を配し、細い突線にはさまれた銘帯となる。銘文は右回りに「上方乍竟真大工青龍宜子」の11文字がみられる。内区は円座をもつ6乳で6区画され、神仙と禽獸の6像が半肉彫されている。6像は神仙1,禽1,鹿1,竜あるいは虎3からなる。鈕は径1.9cmで、その周囲を2本の細い突線にはさまれ、有節重弧文の施された太い突圈鈕座がめぐっている。重量は250gである。広島県四拾貫第9号古墳、島根県松本古墳、香川県猫塚古墳・今岡古墳出土鏡などが6像型式の類似した文様構成をもつ。

車輪石(写真4,第4図)は酸性緑色凝灰岩製で淡緑色を呈している。卵形をした楕円形で長径10.7cm・短径9.5cmを測り、内側に長径6.2cm・短径5.6cmの卵形を呈する内孔をもつ。高さ0.9~1.1cmで、卵形の幅の狭い側が若干低くなっている。厚さは0.3~0.5cmとなっている。石質は軟かいが、表面仕上げは丁寧で光沢がある。環体の外表には削出しによる98本の突線が放射状に施されていて、突線の間はなめらかな凹面となっている。その突線には、削りの深浅の程度と頂部の稜の状態から「高」・「中高」・「低」の3種が認められる。高い突線は頂部が幅0.5



写真 3 中小田第 1 号古墳出土鏡
(1:3)

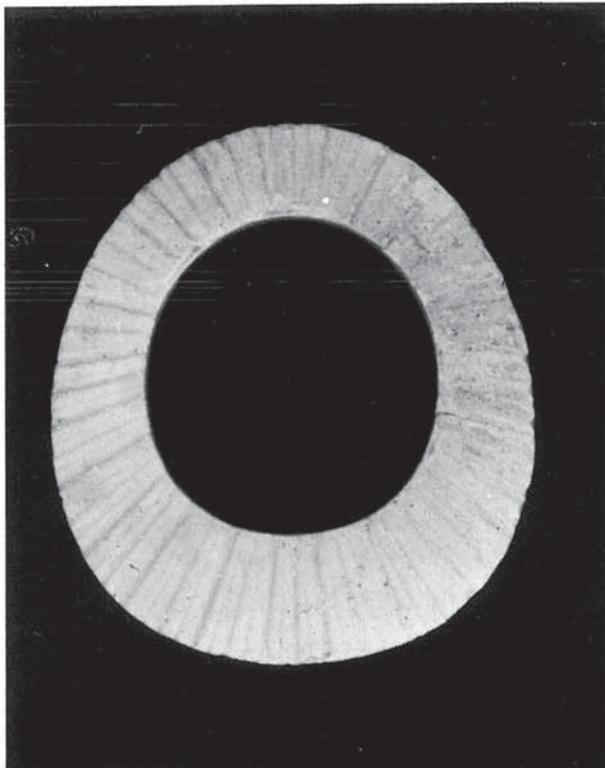
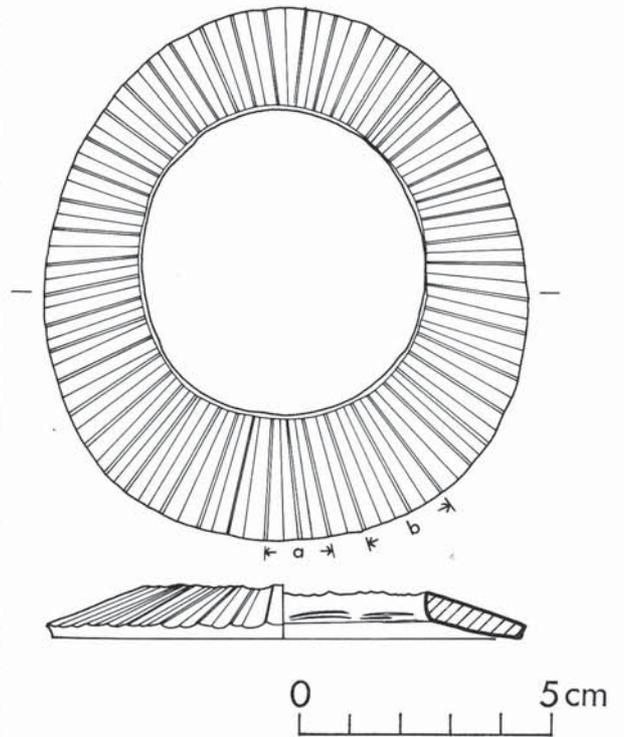
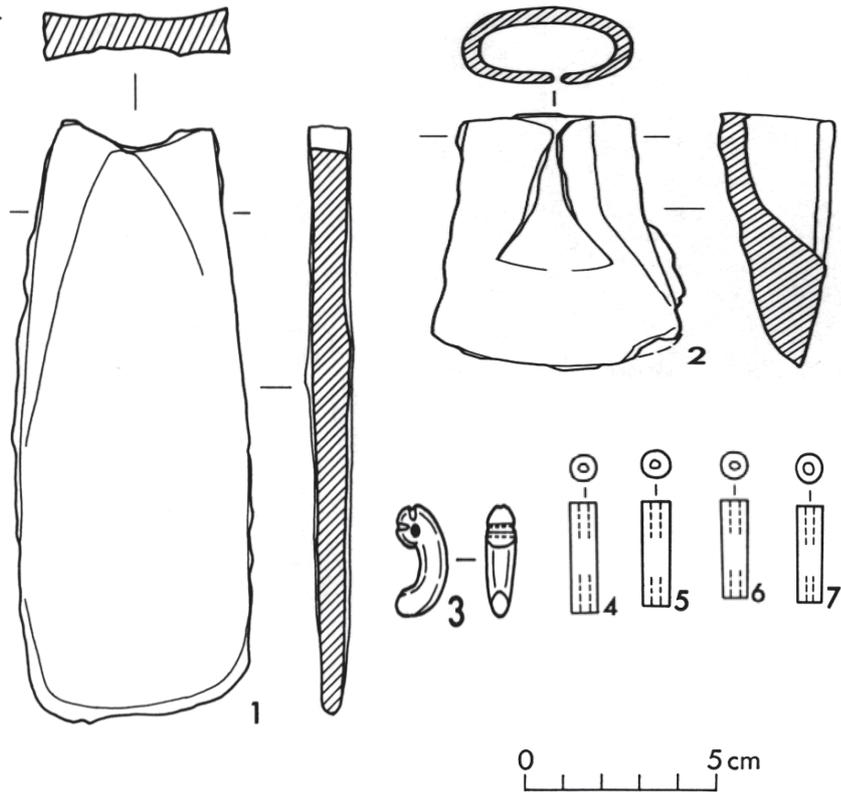


写真 4 中小田第 1 号古墳出土車輪石



第 4 図 中小田第 1 号古墳出土車輪石実測図
(a・bは文様の構成単位)

mmの丸い稜となっていて、低い突線は1本の細い線としてしかとらえられない。中高はその中間形態である。環体の文様は、基本的には「高 - 低 - 高 - 低 - 高」の3本の高い突線を有する単位(a)と、「中高 - 低 - 高 - 低 - 中高」の1本の高い突線を中心にして、その両側に中高の突線を有する単位(b)を、低い突線をはさんで8単位ずつ交互に繰返す構成とな



第5図 中小田第1号古墳出土鉄斧・玉類実測図

なっている。環体の外縁もなめらかな凹面に削っている。裏面はよく研磨されており、中央部が中高気味にややふくらんでいる。内孔の側面は切削後に研磨されているが、部分的に横方向の細い刃痕や狭い曲面を縦方向に刃をあてて削るときに生じる細かな凹凸が認められる。重量は47gで、非常に軽い。この車輪石は、石材は軟質であるが、外形や仕上げの丁寧さ、また文様構成が細かな上に複雑な規則性をもつことなどから、古いタイプに属するものと考えられる。

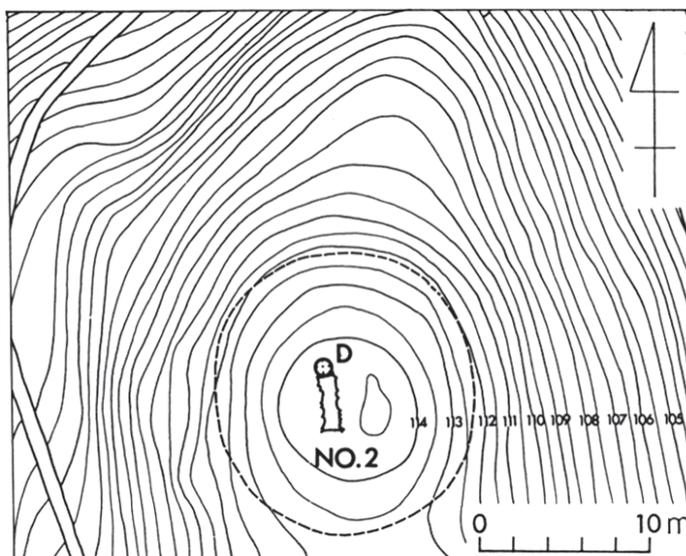
玉類は、勾玉3・管玉約30・ソロパン玉5がある。勾玉は硬玉製2・紫水晶製1があり、硬玉製のうち1個(第5図3)は丁字頭で、3条の刻線がほどこされており、長さ2.05cmを測る。管玉は、良質の碧玉製で、外面の研磨の状態はよく、光沢をもちなめらかである。緑灰色と灰白色の縞模様となっていて、長さは2~3cm、径も0.75cmとほぼ大きさがそろっている。図示はしないが水晶製のソロパン玉は、長さ1cmにみえない小形品である。

短冊形鉄斧(第5図1)は、長さ14.5cm・刃部幅5cm・厚さ0.8~1cmである。基部にはくりこみがあって凹んでおり、やや胴張りの形態をなしている。この基部の凹みが柄の装着に関するものかどうかは不明であるが、小形品であり手斧として使用されたことも考えられる。身の厚さは中央が薄く、外縁が厚いが、これは鉄板を外側から叩いて成形したためであろうか。

有袋鉄斧(第5図2)は、長さ8cm・刃部幅5.3cmのバチ形をなしている。袋部は断面楕円形をなし、幅2.8cm・深さ4cmで、両端を薄く叩きのぼして折り返している。刃部は、大きな弧状を呈しており、全体にふ厚い作りである。

2 . 中小日第 2 号古墳

a 外形 中小田第 2 号古墳は，第 1 号古墳の南方上手約 80 m の標高 114.5 m の丘陵尾根上に位置する円墳で，その規模は直径約 15 m，高さ 2.5 m である。丘陵尾根は狭く，墳丘南側は，尾根と直交するように切断しているが，北側は約 20 度の緩傾斜となっている。東・西側は，約 40 度の自然の急斜面をそのまま利用しており，主として地山を削り整えることによって墳丘外形を



第 6 図 中小田第 2 号古墳地形図
(数字は標高，Dは土墳)

形成しているものとみられる。墳頂より北約 13 m には，長さ・幅約 7 m の三角形のやや平坦な面があり，ここに造り出しの存在する可能性も考えられる。内部主体は，墳頂中央部やや西よりに構築された竪穴式石室である。埴輪・葺石などの外表施設は確認されていない。

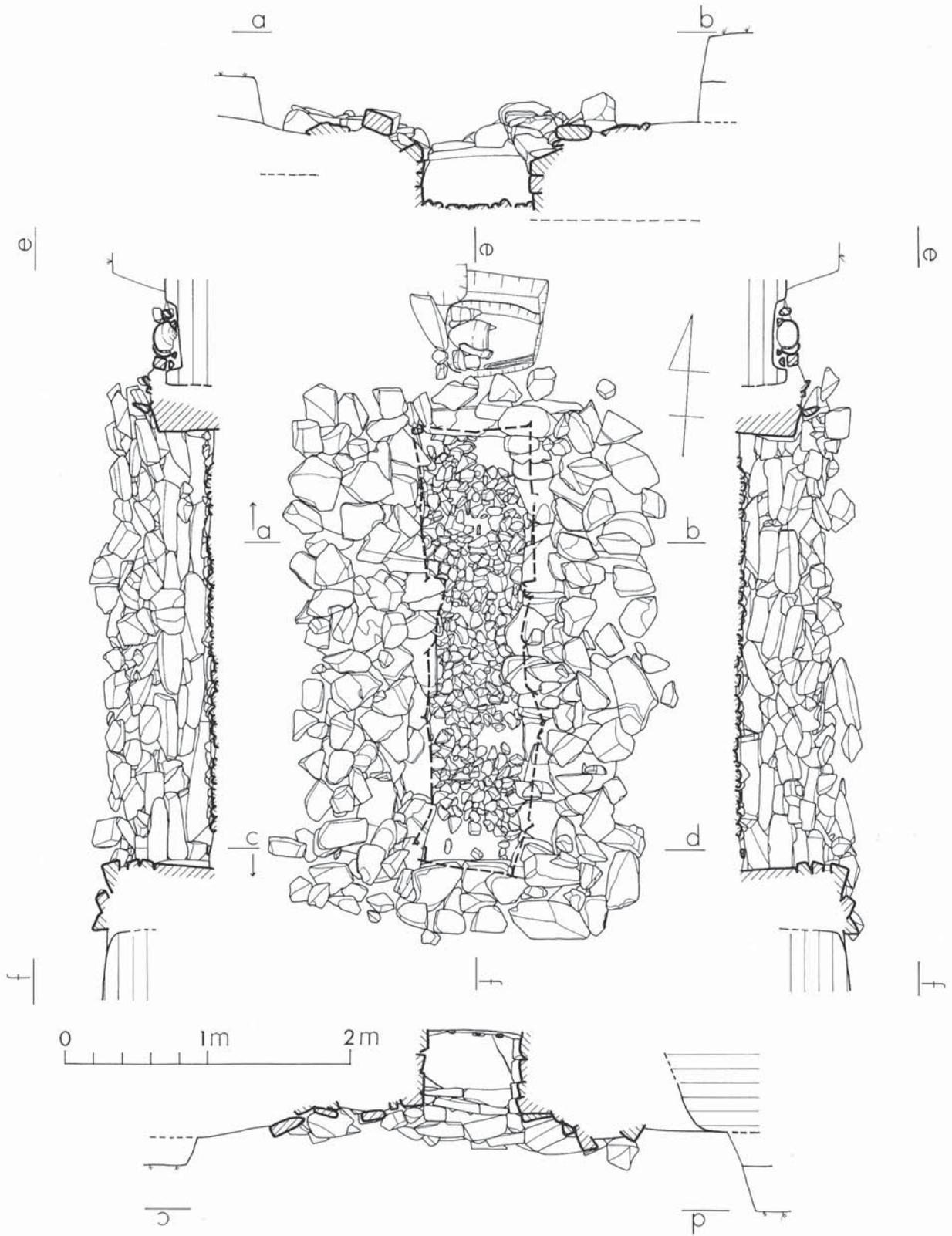
b 内部主体 内部主体は，墳頂中央部よりやや西側に築造された竪穴式石室である。蓋石や側壁上端の一部は失われているが，原形にちかい。石室は，地山を南北約 4 m，東西約 3 m 掘りこんだ墓壇の中に丘陵尾根に沿って主軸を南北に向け構築されており，内法の長さ 3.1 m・幅は北側小口壁で 0.8 m・中央部と南側で 0.7 m・現存高 0.8 m である。東西側壁の石積みは根石を含む 2・3 段の基底部が長さ 50～80 cm・厚さ 10～20 cm の石材を長手積みにし，その上部は，長さ 20 cm 後のやや小形の石材を小口積みにしている。南北の小口壁では，最下段の根石は，長さ 60～80 cm・幅 40～50 cm の石材を立てて使用し，その上の積石は，長さ 40 cm・厚さ 10 cm 前後の石を長手積みにしており，両側壁の石積みとは積み方を異にしている。壁体は，ほぼ垂直にちかく積まれており，持送りの状態は顕著でない。小口壁の根石を石棺状に立てて使用し，その上部の石積みを長手積みにする構造は，竪穴式石室としてはやや簡略化した構造のものといえる。石室床面は，長さ 10 cm 前後の礫がほぼ全面に敷かれており，礫の上面や間隙には朱がみとめられるが，北側が顕著である。石室床面に安置された木棺がどのような形態をなしていたかはあきらかでないが，北側小口壁部の短甲や側壁ぞいの鉄器の出土状態からみて，頭位を北にした長さ 2 m 前後の組合せ式木棺が置かれていたものと推定される。石室控積みの構造は，あきらかにできないが，墓壇や石積みの状態からみて小口壁部は簡略化している。石室が中央部より西に偏っており，東側には別の内部主体の存在が想定される。また，石室北側の小口部に接して弥生後期の甕を使用した埋葬が検出され，控積みの下部の地山にも落ちこみがみられることから，墳丘下には他の遺構の存在する可能性がたつよく，今後改めて調査する必要がある。



写真 5 中小田第 2 号古墳近景



写真 6 中小田第 2 号古墳竪穴式石室全景

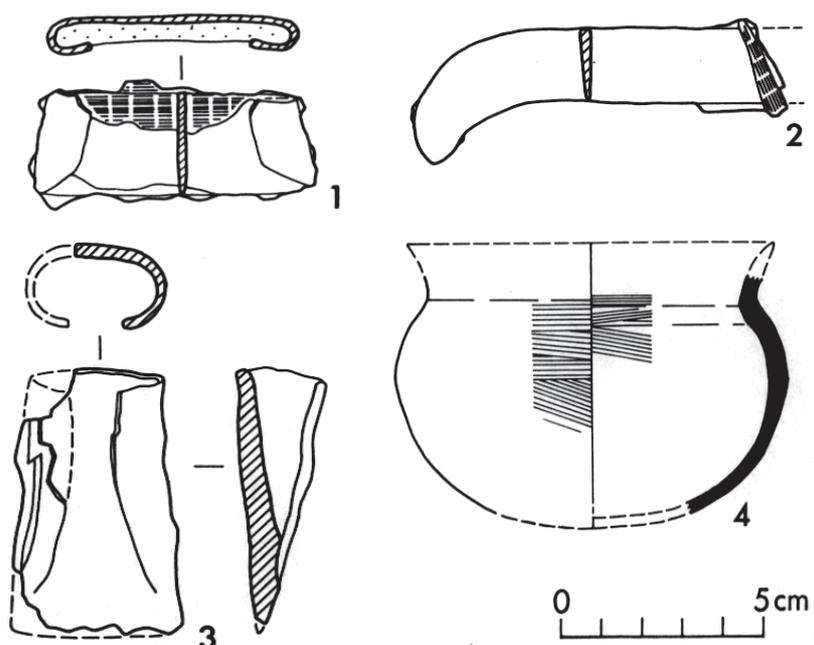


第7图 中小田第2号古墳竖穴式石室实测图

c 出土遺物 竪穴式石室外墳丘から土師器片，平根式鉄鏃 1 が出土したが，石室内から出土した遺物は素文鏡 1 のほかはすべて鍛造の鉄製品であり，武器類として，短甲 1・衝角付胄 1・大形剣 1・大刀 1・剣 1・蛇行剣形鉄製品 1・刀 4・有棘 形鉄製品 2・鏃 8 3 があり，農工具類として，刀子 1・手鎌 1・鎌 1・大形鎌（銘鎌）片 1・斧 1・袋 の一部 1・小形 片 1 がある。これら石室内副葬品の位置は，北小口壁（北壁）に，草摺部を北に向けて，横向きにおかれた短甲の中に胄が正常な状態でおかれており，これに対して南小口壁（南壁）部中央からやや東寄りに素文鏡が鏡面を表にしておかれていた。石室の東北隅近くの東側壁沿いでは鉄鏃（尖根鏃）がたばねられた状態でまとめて，先端を北に向けておかれており，西北隅にも尖根鏃が数本北向きにおかれていた。東壁沿いでは，北側から切先を南に向けた刀 1 に続いて鎌類・斧の農工具があり，東壁沿い中ほどに 2 本の有棘 形鉄器が背中合わせに平行しておかれ，さらにその南側に蛇行剣形鉄製品・大形剣・刀・剣がいずれも切先を南に向けておかれていたのに対し，西壁沿いではやや北側寄りに大刀のみが切先を南向きにおかれていた。また，南東隅，南西隅のやや北寄りの両壁沿いに平根鏃が南向きにおかれており，また，石室中央部，北壁寄りの床面に朱が多く認められた。これら遺物は石室の前後左右にまとめられていることから，ほとんどの副葬品は木棺外，石室と木棺の間隙におかれていたものと考えられるが，素文鏡は木棺内の足元近くにおかれていた可能性もあろう。

胄（写真 7）は通有の横矧板鋌留衝角付胄で，長さ 27 cm・最大幅 19 cm・高さ 13 cm で，地板幅約 6 cm・胴巻板幅 3.2 cm・腰巻板幅 3 cm。頂部に三尾鉄の一部が認められ，後部に幅 4.6 cm の板鋌 3 段が付属しているが，豎眉庇・衝角底板を欠いている。鋌の部分に平織の織物繊維痕が認められる。短甲は酸化して原形が著しく損われており図示しないが，高さ約 50 cm・裾幅約 40 cm の三角板鋌留短甲で，幅 3.5 cm の鉄板を用いた草摺 8 段が付属している。頸甲等その他の付属品はあきらかではない。内外に平織の織物繊維痕が残っており，とくに草摺付近に著しい。これら繊維痕は胄・短甲が布に包まれていたことをしめすものかもしれない。

手鎌（第 8 図 1）は，縦の長さ 2.3 cm・刃幅 6 cm・厚さ 0.2 cm。刃は直刃に近く，研ぎ減りなどあきらかでない。長方形小鉄板の両側を折り返した部分の内側上半部に木柄



第 8 図 中小田第 2 号古墳出土鉄器・土器実測図（1）

の一部の木質が遺存しているが、背面には認められない。厚さ0.4cm前後の木柄が想定される。通常の手鎌にくらべて、刃幅が短い。鎌(第8図2)は小形の曲刃鎌で、現長8.9cm・幅1.8cm。木柄装着部をほとんど欠失するが、折り返し部(0.8cm)が別に残っている。木柄痕があり、刃部に対して約110度の鈍角に木柄が装着されていたらしい。手斧と考えられる小形の斧(第8図3)は長さ6.3cm・刃幅3.8cm・袋部幅3cm・深さ3.8cm。折り返して断面楕円形をなす袋部は、つき合せにならず一方の折り返し部が大部分欠失する。図示はしないが、刀子は現長8cm、茎を欠失し、棟幅0.3cm・刃幅1.7cmの細身のものである。大形鎌とみられるものは、柄部の上端を斜めに小さく折り返すもので、この部分の長さ2.5cmが残っているが幅はあきらかでない。袋鑿の破片は、現長5.4cmで折り返してつき合せになっている袋部(断面長方形で1×1.6cm)が認められる。小形鑿は、現長4.2cmで刃部をほとんど欠失するが、茎より先の部分が1×0.5cmの長方形断面をなしているので袋部をもたない鑿の可能性はある。茎の長さは2.5cmで木柄の痕跡がある。

大形剣(第9図1)は、長さ115cm・剣身97.5cm・関部の方にわずかに幅広で厚くなっており、切先近くでの幅4.7cm・中央部幅5.1cm・関近くでの幅5.8cm、厚さ0.7~1.1cmの断面両凸レンズ形で錆はない。関は段状につくり鞘金具状の痕跡が認められる。茎の長さ18.5cm・幅3cm・厚さ0.4cmでやや細くなり、茎尻近くに直径0.4cmの目釘孔1がある。剣身全体に鞘木が遺存している。大刀(第9図2)は現長108.7cm、切先をわずかに欠失し、本来110cm程度の刀であろう。平棟・平造りの直刀で棟の厚さ約1cm・身幅3cm、刃関につくり、茎の長

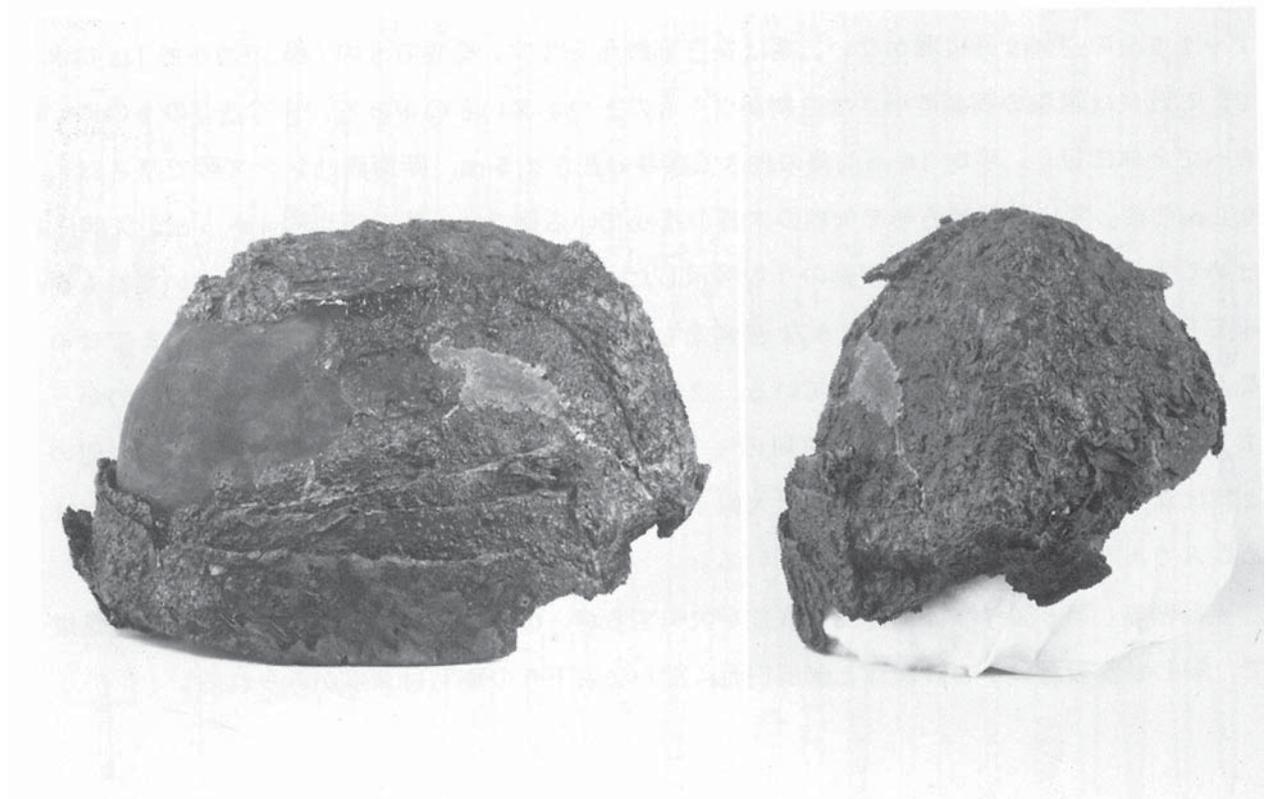
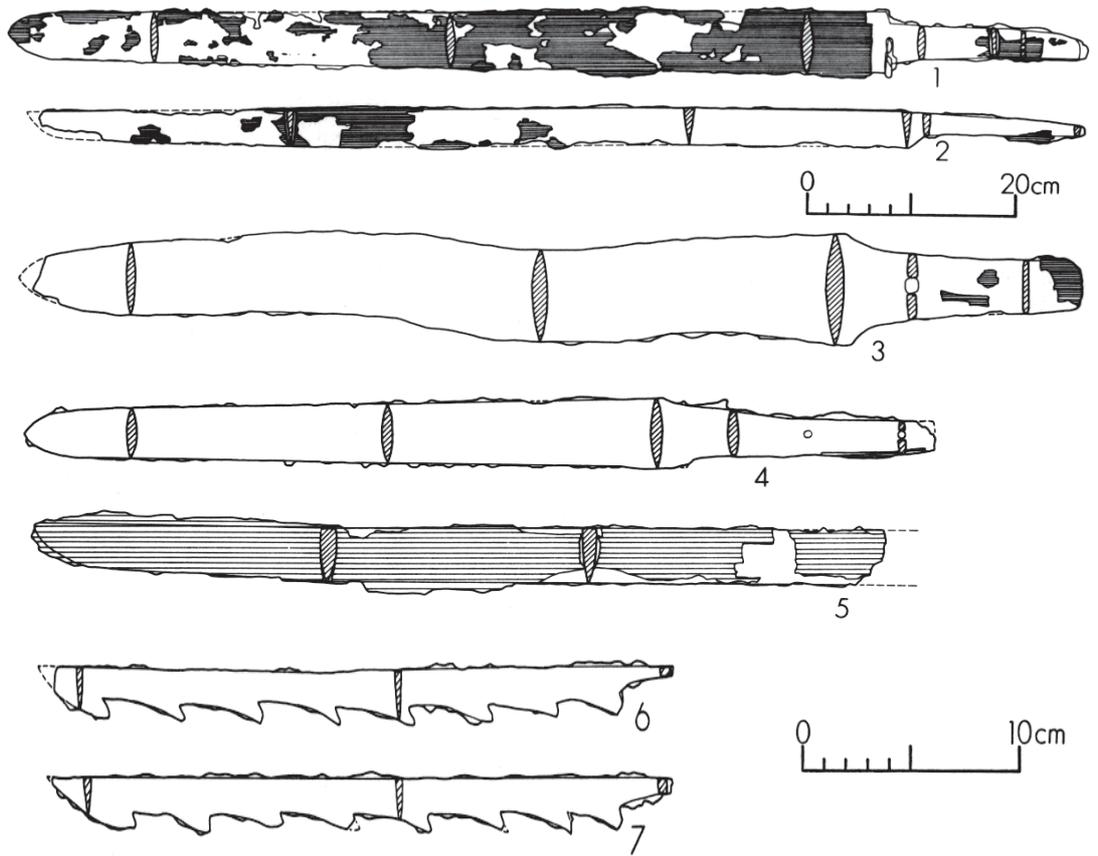


写真7 中小田第2号古墳出土物

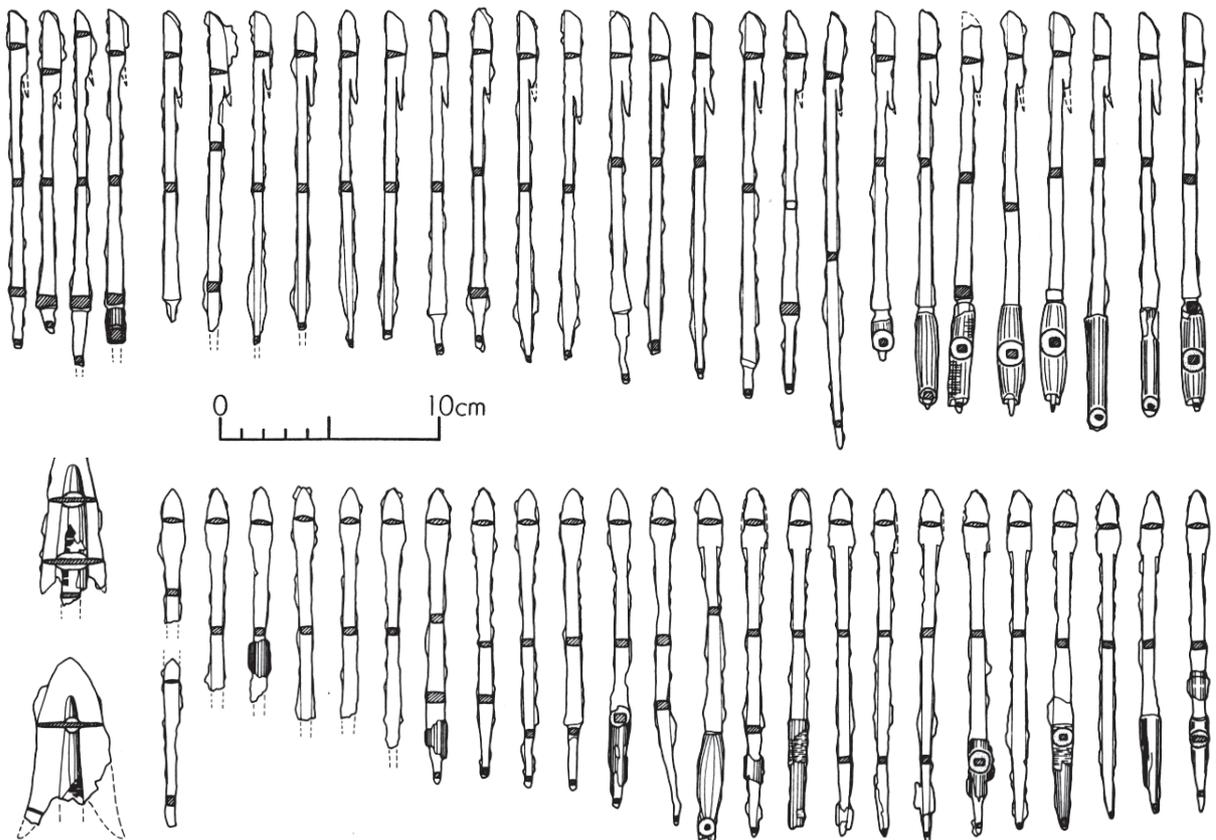
さ17cm・幅1~2cm・厚さは茎棟幅0.6~0.8cm・刃方幅0.4cmで目釘孔は明確でない。刀身中央部を中心に鞘木が遺存している。蛇行剣形鉄製品(第9図3)は、現長48.5cm,切先を欠失する。剣身長38cm前後・身幅3.3cm(切先部)~5.2cm(関部)・厚さ0.4~0.7cmの断面両凸レンズ形で鑄はない。剣身がゆるくS字状に曲っている。関のつくりは弧状で次第に細くうすくなる茎となる。茎の長さ10.2cm・幅2.5~3cm・厚さ0.3~0.4cm。関近くに長方形の目釘孔(0.6×0.7cm)1があり,茎に把木の一部と思われる木質がわずかに残っている。剣とするより手矛とする見方もある。剣(第9図4)は長さ42.1cm・剣身長29.6cm・身幅2.3cm(切先部)~3.1cm(関部)・厚さ0.4~0.5cmの断面両凸レンズ形で鑄はない。茎は比較的長く,12.5cm・幅1.5~2cm・厚さ0.4~0.5cm。茎中央部と茎尻近くに円形の目釘孔と忍孔がある。

鉄刀(第9図5)は,4口出土したもののうち図示したものは,現長40.5cmで関部・茎を欠失する。平棟・平造りの直刀で棟幅0.8~0.9cm・身幅2.6cm。刀身のほぼ全体に鞘木が遺存している。有棘形鉄製品(第9図6・7)は2例ともほぼ同形で,長さ30.2cm,平棟・平造りの細身の刀身の刃先が8個の鋸歯状の逆刺をもつ特異な鉄製品である。棟幅0.4cm,逆刺の部分の身幅2.7cm。茎の長さ2.6cm,断面長方形で,細い茎尻となる。茎がきわめて短く,柄の着装は困難であり,形状からみて儀器と見るべきであろう。鉄鏃(第10図)は尖根鏃と平根鏃に分けられ,尖根鏃のうち片刃造り(第10図上段)のものは36本で,完形のものは最大19.8cmのものがあるが,平均17~18cmの長さである。矢柄の木質の遺存する8例は,鏃身と茎部の長さ13~14cmで,茎部の下半4~5cmが矢柄に入っている。鏃身の長さ3~3.5cmで,長さ1~1.5cmの逆刺は外に開かない。茎は長方形断面をなす。柳葉のもの(第10図下段)は43本で,これには鏃身の両側に小さな逆刺がつくものとつかないものがある。片刃造りのものにくらべて全体に短く,平均16cm前後の長さで鏃身の長さ2.5cm,断面両凸レンズ形で厚さは、0.2cm前後。茎は断面長方形で矢柄の木質の残っている例では,茎の下半約4~5cmが矢柄にはめこまれている。4本の平根鏃のうち図示した2例(第10図下段最左2本)は,いずれも扁平で長三角形を呈しており,大きな逆刺をもつ無茎のもので,矢柄を鏃身先端近くまではめこんでいて,その痕跡がよく残っている。2本とも現長7.5cm,矢柄の直径は上部のものが1.5cm,下部のものが1.1cmで,逆刺の一方のほとんどと他方の先端を欠失している。他の2本は無茎の同形品で,現長3cm・最大幅4cmの小形の三角形を呈した鏃身先端まで矢柄がはめこんであり,逆刺は重抉りになっている。

土師器壺(第8図4)は口唇部と底部を欠失するが,復元口径9cm・器高7cmの小形丸底埴で,胴上半器表面および口縁部と胴部内面に細かな右下りの刷毛目調整がみられる。



第 9 图 中小田第 2 号古墳出土鉄器実測図 (2)



第 10 图 中小田第 2 号古墳出土鉄器実測図 (3)

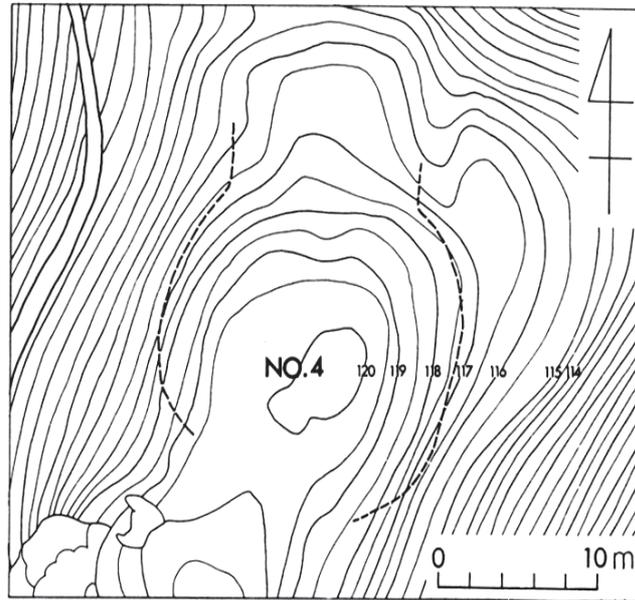
3 . 中小田第 3 号古墳

第2号古墳の南約20mに位置し墳頂部の標高は115.5mで、その規模は直径東西12.5m・南北11m・高さ2m

の円墳である。墳丘は尾根に直交する南北両側を切断して築造されている。外表施設ならびに内部主体は不明である。墳頂部には盗掘によるとみられるくぼみがある。

4 . 中小田第 4 号古墳

第3号古墳の南約25mに位置し、墳頂部の標高は120mである。墳丘の南側は、中世の郭の築造によって埋め立てられたと推定される。北側には、幅10cm・長さ8mも突出部が認められる。突出部は地形的制約からやや西に偏るが主軸を南北にとる帆立貝式古墳と推定される。後円部の直径約18m・高さ約4m・造り出しと後円部の比高は2mを測る。



第 11 図 中小田第 4 号古墳地形図

外表施設ならびに内部主体は不明である。中世の地形変更はうけているものの墳丘の遺存状態は良好である。

5 . 中小田第 5 号古墳

第4号古墳の南東上手90mの尾根上平坦部の標高121mのところ

に位置する直径9m・高さ1mの円墳である。墳丘東側の一部は上砂崩れにより原形を保っていない。墳丘裾の一部には、人頭大ほどの石を用いた列石が確認される。内部主体はあきらかでない。

6 . 中小田第 6 号古墳

第5号古墳の南28mに位置し、墳頂部の標高は122.5mである。その規模は直径22m・高さ3mの円墳で、墳頂部

は、直径10mのややひろい平坦部となり截頭円錐形のととのった墳形をなしている。墳丘は、尾根に直交する南北両側を切断しており、墳丘南側裾には、列石がわずかにみとめられる。ボーリングによると、墳頂平坦部の中央に石室ないし石棺の存在が推定されるが、詳細は不明である。なお、第6号古墳は、本古墳群の円墳中最大で保存がよい。

7 . 中小田第 7 号・第 8 号古墳

第7号古墳・第8号古墳は今回の調査地城外で確認されたものであるが第6号古墳に連続していることから本古

墳群に包括される。第7号古墳は第6号古墳の南25mに位置し、直径約20m・高さ約3mの円墳である。墳頂部は後世に削平されたらしく、外表施設ならびに内部主体の有無は確認できなかった。第8号古墳は、第7号古墳の南に接する直径20m・高さ3mの円墳である。ボーリングによると墳頂部に石室ないし石棺の存在が推定される。

8 . 中小田第 9 号古墳

第1号古墳の北東約20mに位置し 標高は9.3mを測る。
すでに箱式石棺が露出し、規模は不明であるが、直径5m

前後の円墳と推定される。内部主体は箱式石棺4基からなる。

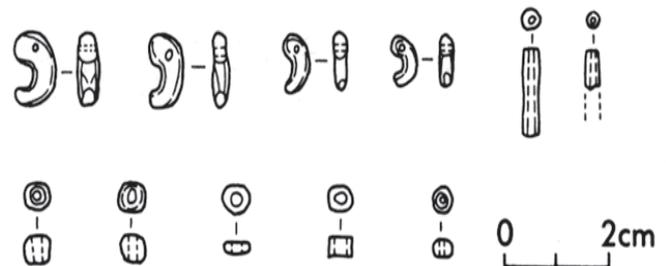
第1号石棺(第13図 1)4基の石棺のうち最も大きく、内法で長さ153cm・幅36cm・高さ32cmを測る。蓋石は4枚、側壁は8枚の板石を用い、蓋石と側壁との間隙には粘土をつめている。石棺の長軸方向はN26度Eで、棺内からはほぼ1体分の人骨が検出され、その頭位は北である。

第2号石棺(第13図・2)第1号石棺の西1mに位置し、内法は長さ89cm・幅25cm・高さ27cmの小形の石棺である。蓋石4枚、側壁4枚からなり、その長軸方向はS8度Wで、頭骨とともに葉口ウ石製勾玉4・碧玉製玉2・ガラス製小玉18(第12図)が出土した。頭位は南である。

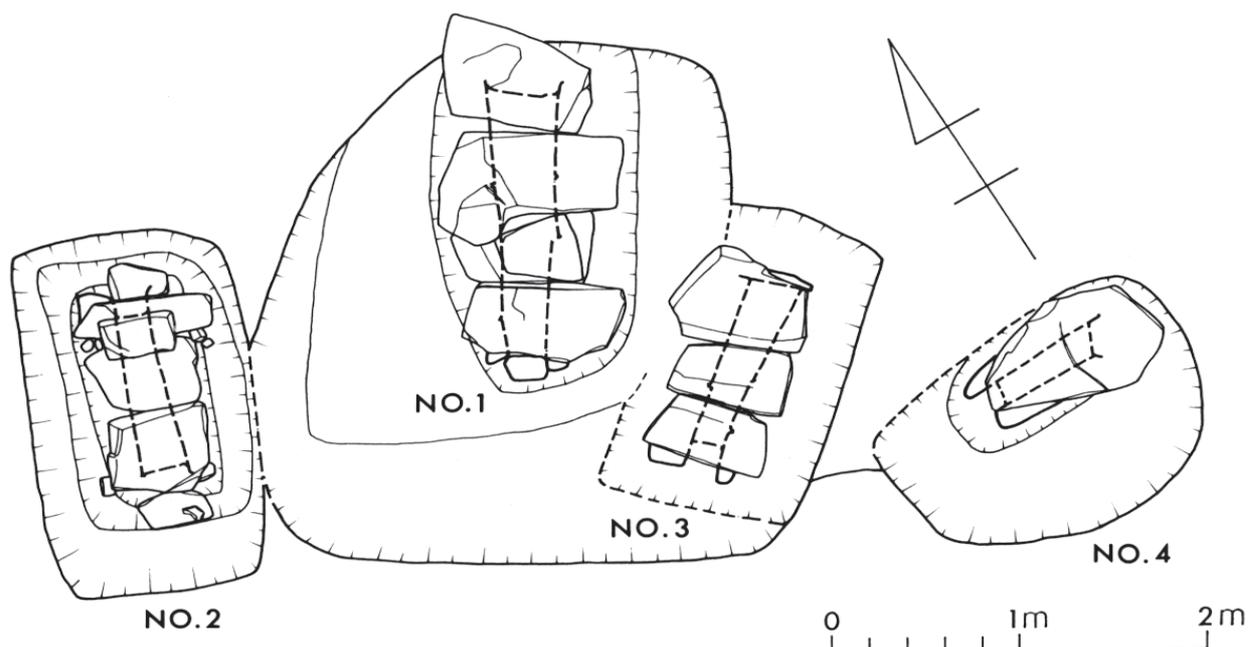
第3号台棺(第13図 3)第1号石棺の東南に接するやや小形の石棺で、内法は長さ100cm・幅26cm・高さ20cmを測る。蓋石は3枚、側壁は7枚からなり、蓋石と側壁の間隙には粘土をつめている。長軸方向はN48度Eで棺内から頭骨1が検出され、頭位は北である。

第4号台棺(第13図 4)

第3号石棺の東南に位置する長さ57cm・幅17cm・高さ25cmの小形石棺である。蓋石は1枚、側壁4枚の板石からなり、長軸方向はN83度Eで頭位は東と推定される。



第12図 中小田第9号古墳第2号箱式石棺出土玉類実測図



第13図 中小田第9号古墳箱式石棺配置図

9. 中小田第10号古墳

第9号古墳の北下手約90mに位置し、墳頂部の標高は、63.5mを測る。封土の流失が著しく墳形や規模は詳細としないが、直径約5mの円墳と推定される。内部主体は中央に主軸を東西にとる長さ200cm・幅40cm・高さ35cmの箱式石棺があり、この北側にも、小形の箱式石棺1基が存在する。

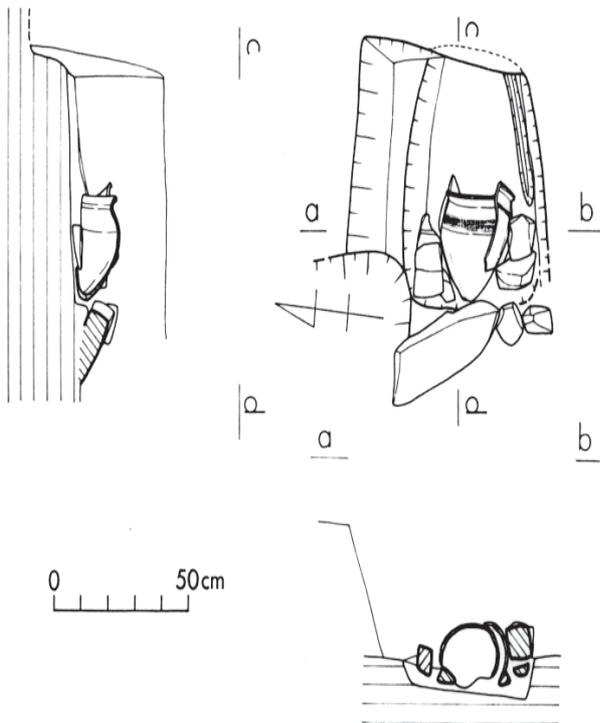
10. 中小田貝塚

第5号古墳の東裾崖面に露出しており、5m×5mの範囲に貝殻や土器片が散乱する。貝塚はシジミ・カキ・ハマグリ・テングニシ・アサリを主体とする。なお、貝塚の西側の尾根には、10×20m前後の平坦面があり、ここに弥生後期の住居址の存在する可能性が強い。

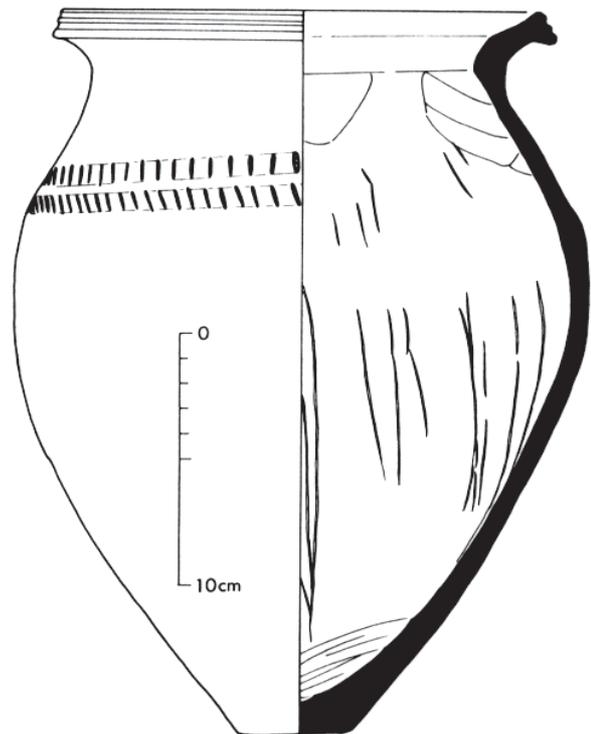
11. 中小田土壌墓

弥生後期の甕を使用した埋葬で、中小田第2号古墳竈穴式石室の北小口壁の外側に位置する。部分的な調査のため全形は不明であるが、現状では地山に幅50cm・深さ10cmの土壌を東西に長く掘り、土壌の先端に近い南・北壁に10cm角の石材を2段に積み、その間に甕形土器を置いている。現状からみて、甕は土壌に埋葬された被葬者の頭部を覆うためのものといえよう。土壌は東端で他の土壌と切り合っている。石室周辺の地山面にはかなり凹凸があり、他にも土壌の存在が想定される。

土器(第15図)は口径17.9cm・胴部最大径21.5cm・高さ28.5cmをはかる。黄灰褐色を呈し、焼成は良い。口縁部には2条の凹線が施され、肩部には貝殻腹縁による綾杉文がある。外面はあきらかでないが、内面は右下りあるいは縦方向のヘラ削りが全面に施されている。器形その他の特徴から弥生時代後期前半に位置づけられよう。



第14図 中小田土壌墓実測図



第15図 中小田土壌墓甕実測図

ま と め

中小田古墳群は、1961年5月の箱式石棺群（第9号古墳）の調査によって、この丘陵に古墳の存在することがはじめて知られた。ついで同年7月の調査により、第1号古墳の吾作銘三角縁神獸鏡の出土や第2号古墳の甲冑類をはじめとする多量の鉄器類の出土から、太田川下流域の前半期の古墳として一躍注目をあびることとなった。そのご1973年頃から学校法人武田学園が、この地域の土地を造成して移転する話がもちあがり、中小田古墳の保存が問題となってきた。1979年の今回の調査は、中小田古墳群の保存のためその地形測量を実施するとともに第1号・第2号古墳の内部主体の実測・写真をとり、古墳群の数・規模ならびにその特色をあきらかにすることにあつた。ここでは第1号・第2号古墳の出土遺物をふくめて、その概要をまとめることにした。

中小田古墳群は、第1号・第2号古墳の丘陵上手には、6基の盛土を比較的よくのこす古墳と、下手には2基の箱式石棺群を内部主体とする古墳があきらかとなり、現状では10墓からなることが確認された。それらは内部主体は不明ながらも、横穴式石室を中心とする後半期のものはふくまれないようである。第5号・第6号古墳では、墳丘裾まわりに列石状の石がめぐらされるようであるが、そのほかの古墳では、葺石・埴輪などの外表施設はあきらかでない。第1号古墳は、従来円墳とみられていたが、北側の第9号古墳のあいだに低平な部分があり、ここにはすでに盛土は存在しないが、西側の墳丘裾の平坦な削り出し面が北方にのびるように観察されるところから、前方後円墳の可能性が考えられ、全般的な封土の流失などを考慮すると、全長約30m・後円部径約20m・高さ約4mの規模が想定される。第2号古墳も従来円墳とされていたが、雑木類を伐採するとこれも北側に幅7mの平坦部がみられ、あるいは造り出し状の施設が存在するのかも知れない。第4号古墳は従来は中世山城関係の遺構とみられていたが、南側の平坦部はのちに埋めたてられた痕跡がみとめられ、北側には幅約10m・長さ約8mの突出部が存在し、全長26m・後円部の径18m・高さ6m前後の帆立貝式古墳とみられる。いずれも表面観察を中心としたものでこんごの検討を要するが、以上の結果、中小田古墳群は現状では10基の古墳から構成され、前方後円墳（第1号古墳）、帆立貝式古墳（第4号古墳）各1基をふくむ可能性がつよいといえる。太田川流域においては、これに匹敵する前半期の古墳群は、現在のところ確認されていない。

中小田古墳群の分布する丘陵には、1965年以降第10号古墳西側下手の崖面に弥生後期土器をふくむ遺物包含層が露出し、この丘陵上には弥生時代の集落の存在が予想されていた。今回の調査では、第5号古墳の東側崖面に、弥生後期の土器をふくむ小貝塚が検出された。第5号古墳をふくむ一帯は、幅10m・長さ20mの比較的傾斜のゆるやかな丘陵鞍部となっており、太田川流域の弥生後期の集落址の例からみると、ここにも弥生後期の集落址の存在が推定される。また、第2号古墳の竪穴式石室の北側には、弥生後期の甕を使用した埋葬が検出されると

ともに、竪穴式石室の掘り方には複雑な切り合いを示す土壌の存在がたしかめられており、古墳の築造前に弥生後期の墳墓の存在したことが考えられる。以上のことから、この丘陵一帯には弥生後期の集落と墳墓が分布し、それにひきつづいて古墳が築造され、弥生時代後半から古墳時代前半期まで連続した重要な遺跡群であることがあきらかとなった。

中小田古墳群の形成された年代については、第1号古墳・第2号古墳・第9号古墳の出土遺物から、ある程度の年代幅はえられる。第1号古墳は吾作銘三角縁四神四獣鏡，上方作銘獣帯鏡，車輪石，短冊形鉄斧，丁字頭勾玉などの出土から，古式古墳の特徴をよく示している。三角縁神獣鏡は京都・大塚山古墳（2面）をはじめとし，大阪・万年山古墳，福岡・石塚山古墳出土のものと同範関係にある。上方作銘獣帯鏡も古式古墳出土のものが多く，中国・四国地域では広島・四拾貫第9号古墳，島根・松本古墳・香川・猫塚古墳などに類例がある。しかし，上記の三角縁神獣鏡の同範関係を示す古墳に比較すると，中小田第1号古墳では車輪石を伴出してやや新しい様相を示しており，その年代は4世紀後半頃におくのが妥当のように考えられる。第2号古墳は衝角付冑・短甲をはじめとして多量の鉄器類が出土し，短甲の三角板鋌留めの手法，鉄鏃類には平根と篋被の長い尖根式をふくみ，曲刃をなす鉄鎌や口頸部のややみじかい小形丸底の土師器の特徴は，5世紀代の古墳としても後出の様相を示すもので，5世紀後半に比定されよう。第9号古墳は小形葉口石製勾玉，細身の碧玉製管玉の出土から，古式の様相を示すといえるが，そのこまかな年代についてはあきらかでなく，5世紀代のものとされよう。以上から中小田古墳群の年代は，現在のところ4世紀後半と5世紀後半の二つの時点があきらかであり，全体もこれに前後する若干の年代幅を想定して，4世紀から5世紀末6世紀初頭あたりとみてよいであろう。

中小田第1号古墳に対比される太田川下流域の古墳は⁽¹⁾，右岸では後漢の内行花文鏡片などを出土した神宮山古墳，三国代の製作とみられる環状乳画文帯神獣鏡を出土した宇那木山古墳⁽²⁾などがあげられる。前者は3基の竪穴式石室からなる円墳，後者は全長35mの前方後円墳かと推定され，後円部中央の主体は未調査である。左岸では現在のところ中小田第1号古墳に対比できるものはみられないが，上流約2kmに位置する西願寺墳墓群⁽³⁾では，墳丘を方形台状につくりだし，土壌や口のひらいた竪穴式石室・箱式石棺などを内部主体とするC・D墳墓群がある。これら埋葬の手法は弥生時代終末からの古い様相を示しており，実年代はやや下降するとしても，中小田第1号古墳に先行するものと推察され，西願寺墳墓群から中小田古墳群への推移が考えられ，太田川下流域における中心的な地位を占めていたのである。

中小田第2号古墳に対比される太田川下流域の古墳は，右岸では三王原古墳⁽⁴⁾，空長第1号古墳⁽⁵⁾，白山第1号古墳⁽⁶⁾などがあげられる。三王原古墳は内部主体は竪穴式石室と推定される円墳で，獣形鏡をはじめ細身の金環，勾玉・管玉・小玉などの玉類，短甲・鉄剣・鉄刀・鉄矛・鉄鏃などの武器・武具類，鉄槌，馬具断片などを出土し，空長第1号古墳は円墳・竪穴式石室で，カラス製小玉・金銅製三輪玉・滑石製有孔円板・鉄剣・蛇行剣形鉄製品・鉄鏃などを出土し，

白山第1号古墳は箱式石棺のなかから短甲が出土したらしい。三王原古墳では鉄製品がややまとまって出土しているのが注目されるが、その出土状態の詳細などがあきらかでない。左岸では、地蔵堂山第1号古墳⁽⁷⁾、上小田古墳⁽⁸⁾がとくに注目される。前者は木棺直葬の方形墳と推定され、素環頭大刀・鉄刀子・鉄鏃・鉄針・U字形鉄鋤もしくは鋤先・鉄鎌・有孔円板などを出土し、後者は蓋石と長側壁側にくりこみをもつ組合式石棺を内部主体とする円墳と考えられ、鉄剣・鉄刀・鉄斧・鉄鎌などを出土し、やや古い様相を示している。太田川下流域の5世紀代の古墳も、中小田第2号古墳のほかは、いずれも散在的で副葬品の鉄器類の量もやすすくない。中小田第2号古墳では、蛇行剣形鉄製品・有棘形鉄製品などの特異な刺突具類をふくみ、この地域においては第1号古墳と同様に中心的な存在であったといえよう。中小田古墳群に後続する特色ある古墳は、現在のところあきらかでない。第1号古墳の南上手700mに位置する湯釜古墳は、従来竪穴式石室を内部主体とする積石の円墳とみられていたが、横穴式石室を内部主体とする前方後円墳のようであり、積石塚という特異な手法とともに注目すべき古墳の一つといえよう。

中小田古墳群は、現在の広島市街地となるデルタ地帯よりやや奥まった太田川下流域を一望できる好位置にある。この下流約3.5kmの太田川放水路には、古代末期から港としての機能をもった巖島社領桑原新庄内の遺跡とみられるものがあり、古墳時代においては中小田の丘陵付近まで海のいりこんでいたことも推定される。これからすると、直接内海に面してはいないが、内海交通の一つの拠点であったことが考えられるとともに、太田川下流域の沖積地を扼したところに、この地域での優位な位置を保持しながら中小田古墳群が形成された背景があるといえよう。

注

- (1) 松崎寿和・潮見浩「先史時代の広島地方」広島市役所『新修広島市史』第1巻総説編所収1961年。
河瀬正利「歴史のあけぼの」広島市役所『高陽町史』所収1979年。
- (2) 広島大学文学部考古学研究室資料による。
- (3) 金井亀喜編『西願寺遺跡群』広島県教育委員会1974年。
- (4) 玉井源作「山本村三王原古墳」広島県『史蹟名勝天然記念物調査報告』第1輯所収1929年。
中田昭「広島市祇園町三王原古墳について」『芸備』第1集所収1973年。
- (5) 広島市教育委員会『空長古墳群発掘調査報告書』広島市の文化財第13集1978年。
- (6) 広島県教育委員会『白山城跡発掘調査概報』1973年。
- (7) 金井亀喜編『高陽新住宅市街地開発事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書』広島県教育委員会1977年。
- (8) 本村豪章「広島県安佐郡高陽町上小田古墳調査報告」『広島考古研究』第2集所収1960年。

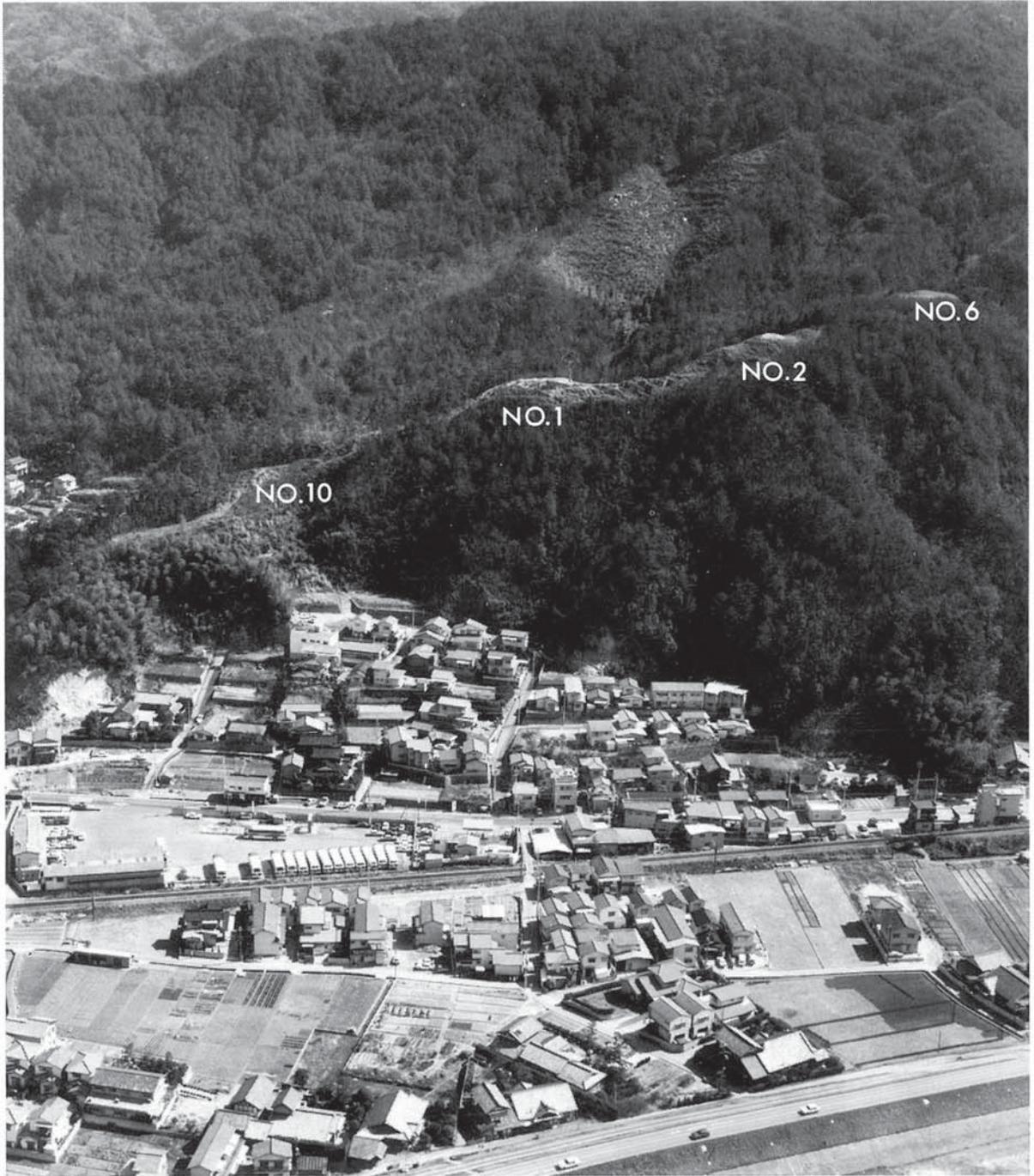
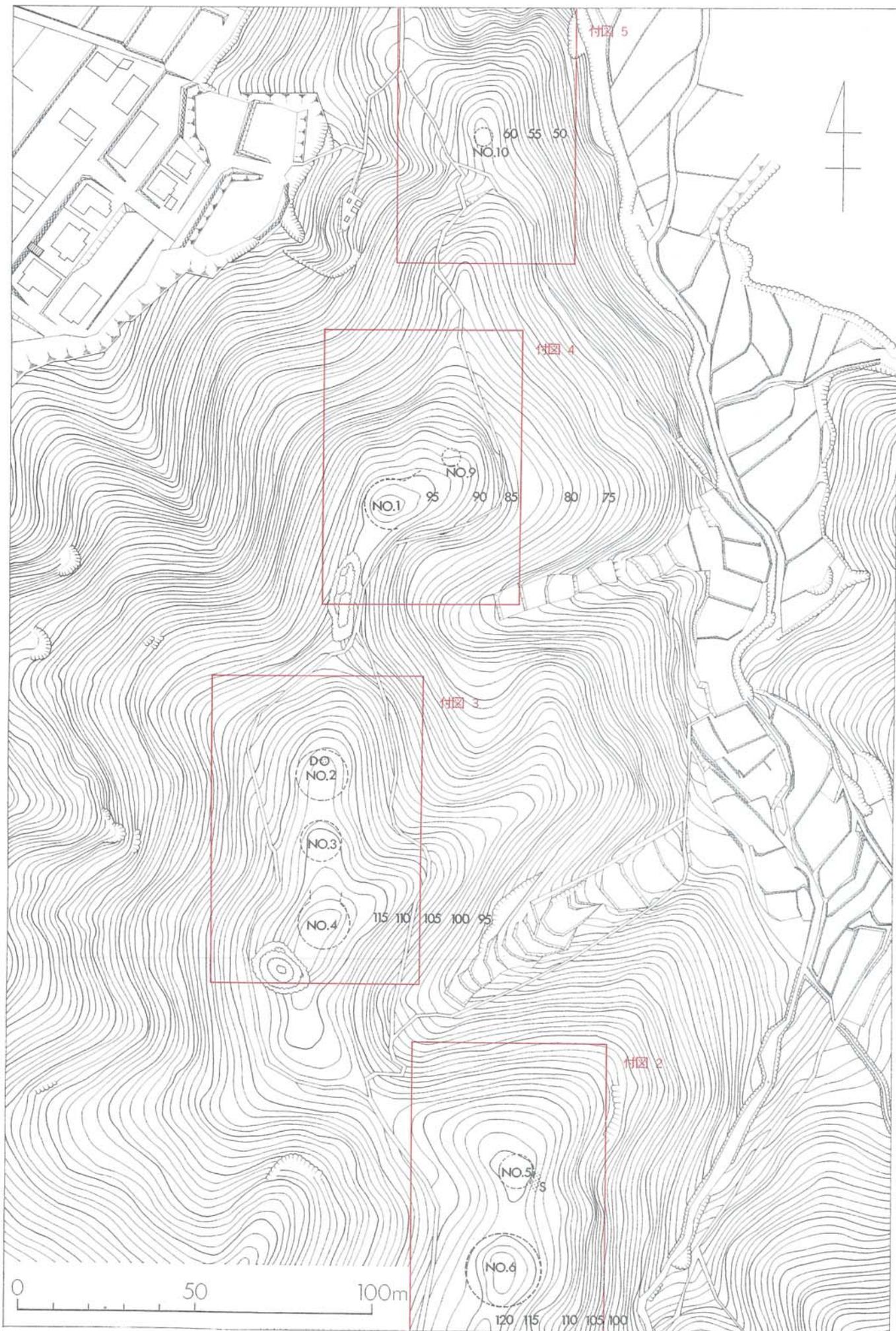
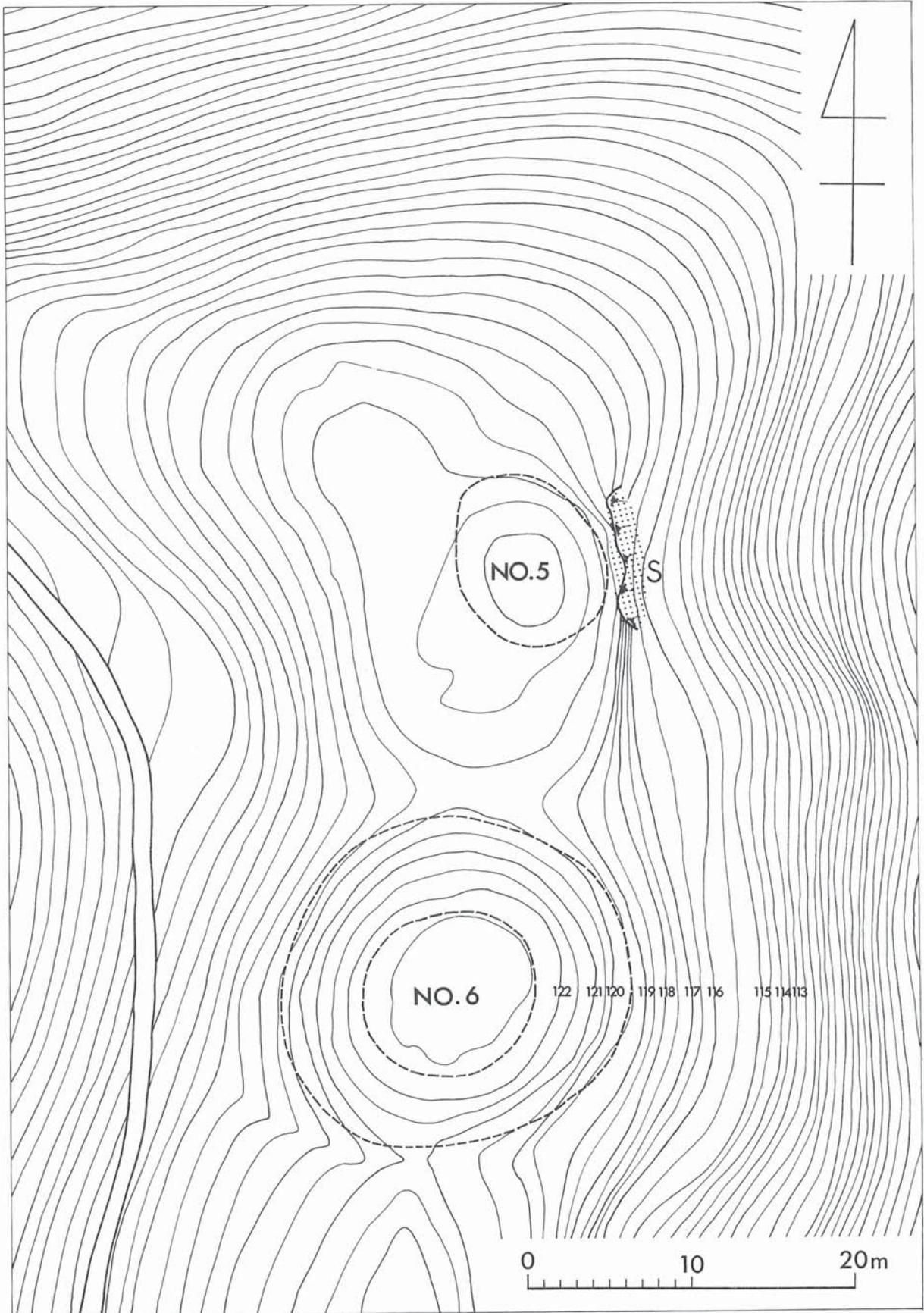


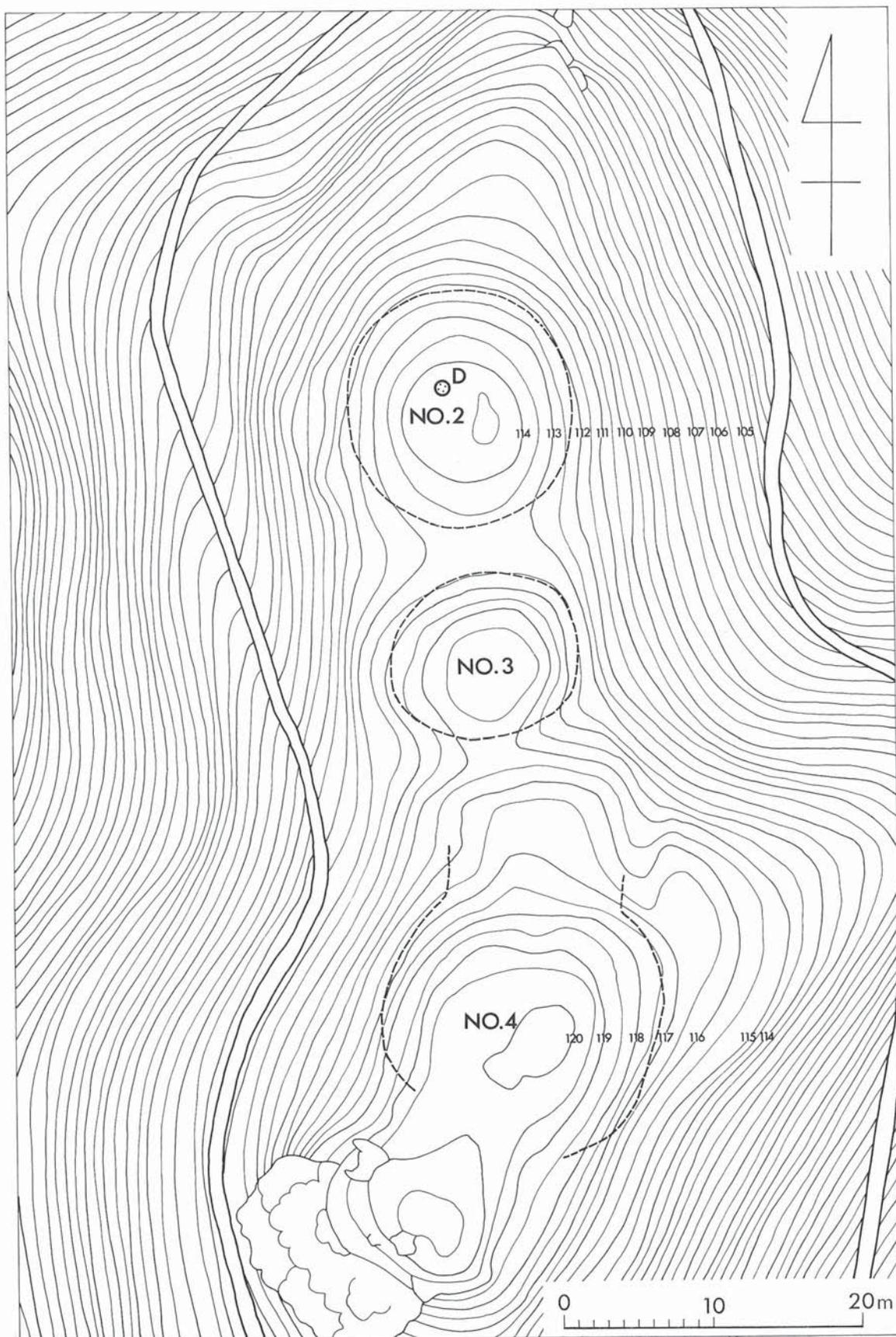
写真 8 中小田古墳群付近航空写真



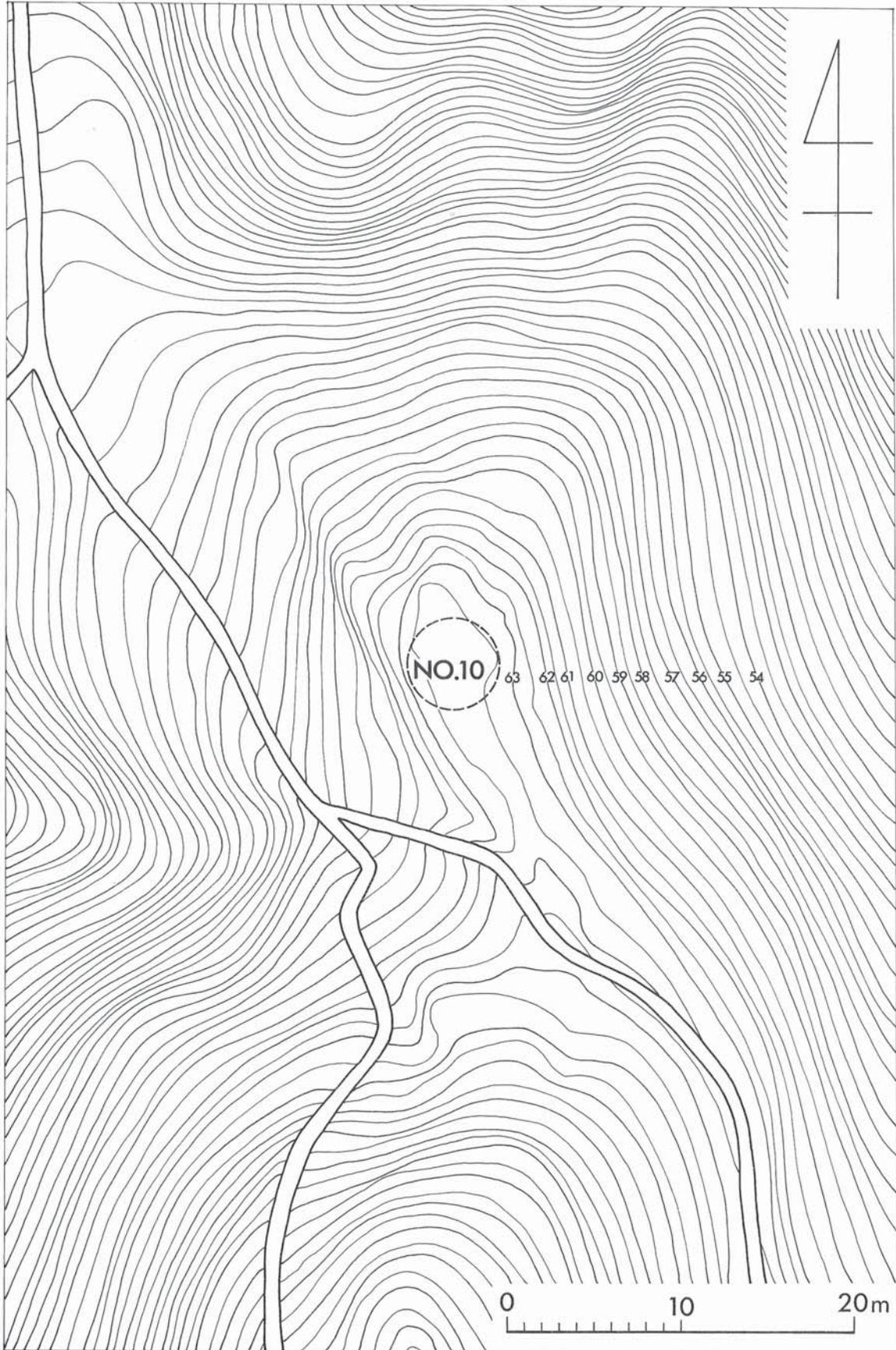
付図 1 山小田表積層状地形形質を数字注し高さ、及び距離 100m 単位



付図 2 中小田第5号・第6号古墳・貝塚付近地形図
 (数字は標高, 等高線は 50 cm 間隔, S は貝塚)



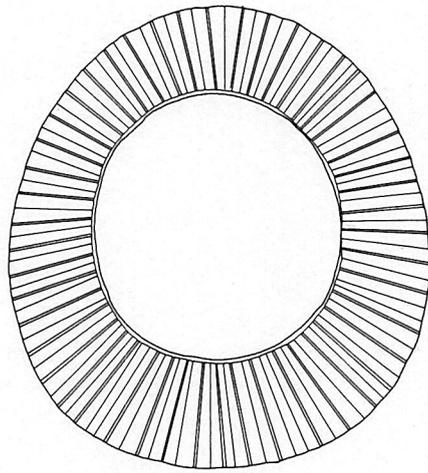
付図 3 中小田第 2 号・第 3 号・第 4 号古墳付近地形図
 (数字は標高, 等高線は 50 cm 間隔, D は土墳墓)



付図 5 中小田第 10 号古墳付近地形図
 (数字は標高, 等高線は 50 cm 間隔)

あ と が き

1. 本書は、1979(昭和 54)年 9 月 25 日から 10 月 29 日にかけて実施した中小田古墳群の調査の成果をまとめたものである。作成にあたり、1961(昭和 36)年に行なった調査の成果もあわせて収録した。
2. 1979 年の調査は、国・県の補助金を得て広島市教育委員会が実施したが、現地調査にあたっては、広島大学文学部考古学研究室の指導・助言を受けた。また、土地所有者の学校法人武田学園、浦元義夫、香口真作、沓内節夫、平田美智子、松谷善美、村中郁夫、山本幹三の各氏および三野丈一・小田一義氏(可部郷土史研究会)、高陽公民館、広島県教育委員会文化課など多くの方々から多大な協力を受けた。記して謝意を表したい。
3. 現地調査には、潮見浩・川越哲志・河瀬正利・古瀬清秀・中越利夫・山内純代・松井和幸・古門雅高(広島大学)、松村昌彦・中田昭・桑原隆博(広島県教育委員会)、石田彰紀・幸田淳(広島市教育委員会)があたった。
4. 本書の作成は、潮見・川越・河瀬・古瀬・石田・幸田が分担して執筆し、潮見がこれを編集した。原図の作成には、松井・古門の協力を受けるとともに、1961 年の資料については藤田等(現静岡大学)、本村豪章(現東京国立博物館)、松下正司(現広島県草戸干軒町遺跡調査研究所)の作成したものを使用した。また、本書の製図は河瀬が、写真は川越が担当した。
5. 写真 8 に使用した航空写真は、井手三千男氏(はにわ会)から提供を受けた。
6. 「第 1 図は、建設省国土地理院長の承認を得て、同院発行の 25,000 分の 1 地形図を複製したものである。(承認番号)昭 55 中複、第 60 号」



1982(昭和57)年3月 第2版

広島市の文化財 第16集

中小田古墳群

—広島市高陽町所在—

編集 広島大学文学部考古学研究室
潮見 浩
発行 広島市教育委員会
印刷 美研社